

英語とスペイン語

*上田博人

転載許可済：『NHK ラジオスペイン語講座』，1979

1. 母音の発音

スペイン語を学び始めると多くの語が英語と類似していることに気づく。これはスペイン語がラテン語から派生した言語であり、一方英語が多くの語をラテン語やフランス語から借用しているためである。一方、英語とスペイン語で共通の源をもった語がそれぞれほぼ規則的な変化を遂げてきたので両言語の対応をルールとして示すことができる。これは語彙の記憶にも役立つ。はじめにアルファベットの名称を手掛りにそのいくつかのルールを探ってみよう。

●アルファベット

アルファベット(alphabet < ギリシャ語alpha+beta)はエジプトの絵文字にまでさかのぼるが、ここではラテン語を出発点とすれば十分であろう。ラテン語のアルファベットは、

A [a], B [be], C [ke], D [de], E [e], F [ef], G [ge], H [ha], I [i], K [ka], L [el], M [em], N [en], O [o], P [pe], Q [ku], R[er], S [es], T [te], V[u], X [ix]

の21文字で、後にギリシャ文字の υ(ユプシロン)と ζ(ゼータ)を写すためのYとZが加えられ、おおよそこの構成で西ヨーロッパの諸言語に伝わった。この段階のアルファベットは音と綴り字がほぼ1対1に対応していた。以下は現代スペイン語のアルファベット(alfabeto)である。

A [a], B [be], C [*e], Ch [t*e], D [de], E [e], F [éfe], G [xe], H [át*e], I [i], J [xóta], K [ka], L [éle], Ll [é@e] M [éme], N [éne], Ñ [é↗e], O [o], P [pe], Q [ku], R [ére], rr [érre], S [ése], T [te], U [u], V[úbe], W [úbe doble], X [ékis], Y [í griéga], Z [*éta]

rrは語中にのみ現われ、語頭と語末ではRだけが現われる。

ラテン語からの音韻変化の結果、Cは[ke]から[*e]に替わり、Gは[ge]から[xe]¹となったが、文字はラテン語のものをそのまま保っている。また新たに Ch, J, Ll, Ñ, rr, U, W の7文字が加えられた。

現代英語のアルファベットは、

A [ei], B [bi↗], C [si↗], D [di↗], E [i↗], F [ef], G [d* i↗], H [eit*], I [ai], J [d* ei], K [kei], L [el], M [em], N [en], O [ou], P [pi↗], Q [kju↗], R[↗r], S [es], T [ti↗], U [ju↗], V[vi↗], W [d@bl ju↗], X [eks], Y [wai], Z[zi↗]

¹ [x]は口の奥で発音される強い摩擦音。ドイツ語の Ach-Laut.

の26文字である。ラテン語と比べてみると音の変化が著しいことがわかる。新たに加えられた文字は **J, U, W** の3文字である。

● I と J

英語でもスペイン語でも **I, J** と **U, V, W** はそれぞれ類似しアルファベットの順番でも隣接しているが、これは歴史的な理由による。古典ラテン語では **I** は母音 [i] のほかに子音の [j]²も兼ねていたが、後にスペインで **J** は子音にだけ、**I** は母音にだけ用いられるようになり、英国でも17世紀中頃に2つに分化した。文字 **J** の名称は英語では表音的に[d*ai]、後に右隣の**K**の母音に合わせて[d*ei]となった。一方スペイン語の **J, jota** [ホータ] はギリシャ文字のイオータに由来する³。

現代英語では古英語からの [j] は **Y** でつづられ⁴、一方ラテン語の **I** そして後の **J** に由来するものは古代フランス語の [d*] 音を通して英語に借用され、綴りには **J** の形で残った。こうして英語の **J** で始まる語の多くがラテン系の語であるため、ラテン語を直接の祖先とするスペイン語とは次のように対応する。ラテン語、英語、スペイン語をそれぞれL, E, Spと略す。

L.JOCUS 「冗談・娯楽」 → E. joke 「冗談」 / Sp. juego 「遊び」

L. JUDICE → E. judge / Sp. juez 「判定人」

[ジョーク] と [フエゴ] では発音が大きく異なるが、綴り字を見れば明らかに類似している。このように比較のためには発音よりも綴り字を見る方がわかりやすい。

● UとV

I と **J** の関係は **U** と **V** についても同様である。**U** は **V** の草書体であって本来同一の文字であったが、次第に分化して **V** は子音に、**U** は母音に使われるようになった。古英語では **V** は語頭に立たず、現代英語においても古英語にまでさかのぼる語では**V** は必ず語中に現われる⁵。一方語頭に **V** のある語はほとんどが外国語(多くはラテン系)からの借用語なのでスペイン語と以下のよ

² 英語の yes の y の音。

³ このjotaは現代スペイン語で次のように使われる。

No sé ni jota de matemáticas. (私は数学がまるでわからない)

この表現は聖書にまで遡る古いもので聖書の「山上の垂訓」の一節にもある。

(...) de cierto os digo que hasta que pasen el cielo y la tierra, *ni una jota ni una tilde* pasará de la ley, hasta que todos se haya cumplido. (*El Santo Evangelio Según San Mateo*,5,18) 「はっきり言っておくが、すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」(共同訳)。

英語(欽定訳)では *One jot or one tittle shall in no wise pass from the law* とあり、これも現代英語で not a jotの形で使われる。いずれもイオータ(>スペイン語jota, 英語jot)がヘブライ文字やギリシャ文字の中でも最小であったために生まれた表現である。

⁴ 例. year, yet.

⁵ 例. ever, heaven, seven.

うに対応する.

L. VANUS → E. vain / Sp. vano 「むなしい」

L. VALLEM → E. valley / Sp. valle 「谷」

L. VOCEM → E. voice / Sp. voz 「声」

● W

英語とスペイン語の辞書で**W**の項を調べると、英語には多くの語があるのに対してスペイン語にはほとんどないことがわかる。英語では[w]音が古英語以来豊富に保存されたのに対し、スペイン語ではラテン語源の子音の **V** [w] が [b] へと変化したので現代語でwから始まる語といえば wat, whisky などの外来語に限られる。

スペイン語でゲルマン起源の **W** で始まる語を借用したものは, gu- となって現代スペイン語に残っている。これは語頭の半母音を強めて完全な子音にしたために起きた変化だが、英語では **W** が保持されているので次のような対応になる。

E. war (古英語wyrre) / Sp. guerra 「戦争」

E. wise (古英語wise) / Sp. guisa 「方法」

E. William⁶ / Sp. Guillermo(人名)

Wの文字の名称は英語でdouble u 「2つのu」、スペイン語でuve doble 「2つのv」と異なる。これは先に見たように**U**と**V**が元来同じ文字であったためである。**W**の文字は7世紀に合字のuuの形でアングロ・サクソンの書で工夫され、これが大陸に伝わり、再び11世紀に今度は**W**の形となってイギリスに逆輸入された。

●母音字の名称

母音字の名称を比べると、スペイン語がラテン語の名称をそのまま受継いでいるのに対し、英語では音が著しく変化していることがわかる。英語の長母音は**A** [a[↗]] > [ei], **E** [e[↗]] > [i[↗]], **I** [i[↗]] > [ai], **O** [o[↗]] > [ou], **U** [u[↗]] > [ju[↗]] という大きな変化を遂げたが、綴り字の方はそのまま中世英語のものを引き継いだので、発音と綴り字の大きな不一致を招いた。現代英語で単語の終りの **E** は前の母音が長音であることを示し、**A** は [ei], **E** は [i[↗]] のようにアルファベットの名称と同じ母音で発音される。一方スペイン語では長母音は変化しなかったため、そのままローマ字式に発音する。

E. cape [keip] / Sp. capa [cápa]

E. race [reis] / Sp. raza [rrá*a]

E. base [beis] / Sp. base [báse]

E. theme [*i[↗]m] / Sp. tema [téma]

E. scene [si[↗]n] / Sp. escena [es*éna]

⁶ cf. 古高ドイツ語 Willahelm.

E. mine [main] / Sp. mina [mína]
E. spine [spain] / Sp. espina [espína]
E. note [nout] / Sp. nota [nóta]
E. tone [toun] / Sp. tono [tóno]
E. rose [rouz] / Sp. rosa [rrósa]
E. dispute [dispju⁷t] / Sp. disputa [dispúta]
E. fugue [fju⁷g] / Sp. fuga [fúga]

スペイン語ではラテン語の短母音が大きく変化した。アクセントのかかったラテン語の短母音の **E** と **O** はそれぞれ **IE, UE**と変化したために英語とは次のように対応する。

L. POSITUM → E. post / Sp. puesto 「位置」
L. FORTIA → E. force / Sp. fuerza 「力」
L. CERTUS → E. certain / Sp. cierto 「確かな」
L. DESERTUM → E. desert / Sp. desierto 「砂漠」

スペイン語では母音の変化に合わせて綴り字も変化したために、最終的に5母音対5文字の1対1の対応になった。しかし派生語間の関係を見ると, probar 「試す」: prueba 「試み」のように形の上で離れてしまった。逆に英語では保守的な綴りのために音が違っても, たとえば derive [ai] - derivation [i] のように派生語間の同一性が強く保たれている。この点から見ると複雑だといわれている英語の綴りの中にも合理的な面があると言える。

2 子音の発音

スペイン語のアルファベットの中には **Ñ** というラテン語にも英語にもない文字がある。また **CH** と **LL** は独立した単位であることがラテン語や英語と異なる。これらは **A** をつけて発音すると, それぞれ **ÑA** [ニャ], **CHA** [チャ], **LLA** [リャ] というように [ヤ] の音が現われる。この系列はラテン語にはなく, 後に発達したものである。

● CH

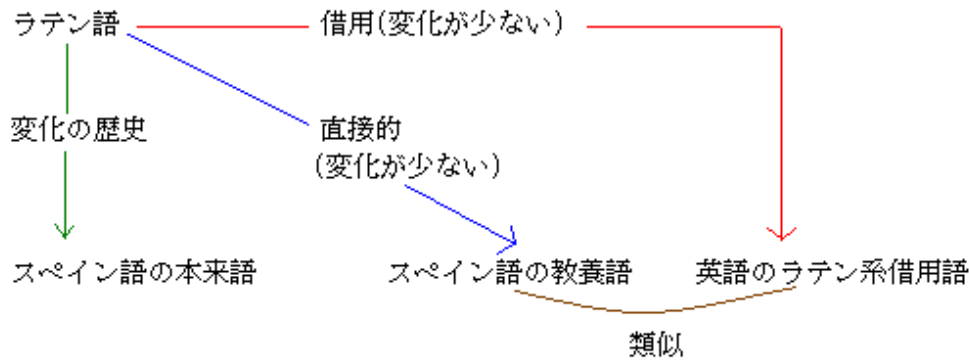
CH にはラテン語の **CT** という子音の連続に由来するものがある。

L: NOCTEM > Sp: noche 「夜」
L: OCTO > Sp: ocho 「8」

[t*] はラテン語にはなかった音で新たに文字が必要になり, 11世紀の末ごろから **CH** が使われ始めた⁷。

⁷ これは古いフランス語の **ch** [t*] を借用したものらしい。なお, 現代フランス語の **ch** はさらに変化して[tʃ]

この CT > ch [t*] のような変化はスペイン語に固有のもので、その結果 *noche*, *ocho*などの語は英語の対応形である *nocturn*「夜想曲」, *octave*「オクターブ, 8度の音程」など一見ただけでは関連があるようには見えない。この *noche*, *ocho* の類の語を「本来語」と呼ぶことにする。一方直接ラテン語から取り入れた語もあり、これは当然ラテン語形に近く、また英語内のラテン借用語とも類似している。これを「教養語」と呼ぶ。この関係を簡単な系図で示すと次のようになる。



次がそれぞれの例である。

ラテン語	英語	スペイン教養語	スペイン本来語
DIRECTUS	direct	directo	derecho
「まっすぐな」	「まっすぐな」	「まっすぐな」	「まっすぐな・正しい」
STRICTUS	strict	estricto	estrecho
「緊張した, 厳格な」	「厳格な」	「厳格な」	「狭い, 厳格な」

この例でわかるようにスペイン語内で本来語と教養語の間に意味の微妙なずれがあり、むしろ教養語と英語の方がかえって近い関係にある。これも経路を考えれば当然である。

● LL

LIは本来語に現われる文字で、教養語の fl-, pl-, cl-に対応する⁸。

ラテン語	英語	スペイン教養語	スペイン本来語
FLAMMA	flame	flama	llama
ほのお, 火	同	同	同
PLANUS, -M	plain, plane	plano	llano
平らな, 平面	平らな, 平面	平らな, 平面	平らな, 平原
CLAMARE	claim	clamar	llamar

[シュ] という音になった。

⁸ [㊦] [リャ] の音にも、時代や方言の差によって、l,i(y)ll,lli(y),il,gl,gli...といったさまざまな異体があったが、Castilla 地方では13世紀以来llに落ち着いた。現在のスペイン語ではLLの[㊦] [リャ]という発音はスペイン北部や南米アンデス地域など一部に残されているが、全体では[j] [ヤ] または [㊦] [ジャ]の方が優勢である。

叫ぶ, 呼ぶ	主張する	叫ぶ	呼ぶ
--------	------	----	----

他に重子音LLに由来するものもある。

cuello 「首」< COLLUM [コッルム] 「首」 cf. E. collar 「カラー,襟」

● Ñ

Ñは教養語の n(< NN), gn, ni などに対応する⁹。

ラテン語	英語	スペイン教養語	スペイン本来語
ANNUS, 年	annual 年々の	annual 年々の	año 年
SIGNUM 記号	sign 記号	signo 記号	seña 合図
HISPANIA スペイン	Spain スペイン	hispanico スペインの	España スペイン

こうした本来語—教養語の対は新たに加えられた**CH, LL, Ñ**に限らず他にも以下のような対応がある。

● 無声子音

P, T, C [k] は本来語の語中の母音にはさまれた位置で、それぞれ **B, D, G** となったが、教養語にはこのような変化はない。

ラテン語	英語	スペイン教養語	スペイン本来語
P SUPER 上に,越えて	super- 「上」を示す接頭辞	super- 同	sobre 前置詞「の上に」
T VITA 生命	vital 生命の	vital 同	vida 生命
C DELICATUS 魅力のある, 優美な	delicate 優美な, 繊細な	delicado 同	delgado やせた

重子音¹⁰は単子音になった。これには本来語と教養語の区別はなく単子音になったが、対応する英語の形には重子音を保っているものが多い。

ラテン語	英語	スペイン語
BB ABBATEM,	abbot	abad

⁹ [ñ] 「ニャ」の音に対しても,ni,in,ng,gn,n,mn などの異体があったが, Castilla では主にラテン語の NN(nn)をそのまま用いていた。やがてその略字体から現代語の ñ が生まれた。

¹⁰ 同じ子音の連続。

	修道院長	同	同
PP	APPUNCTARE	appoint	apuntar
	指す	同	同
DD	(IN-)ADDERE	add	añadir
	加える	同	同
TT	ATTENDERE	attend	atender
	注目する	出席する, 留意する	留意する
GG	AGGRESSIONEM	aggression	agresión
	始動	侵略, 攻撃	同
CC	ACCENTUS	accent	acento
	アクセント	同	同
MM	SUMMA	sum	suma
	合計	同	同
SS	PASSUS	pass	paso
	歩み	通行	歩み

RR は現代語では舌先を何度か震わせる音(巻き舌)となった。

L. CURRERE > Sp. correr (走る)

● F と H

H はけっして発音されない文字なのに、アルファベットの中で堂々と座を占めている。ラテン語の **H** や **F** に由来するもの¹¹, ギリシャ語の有気音やアラビア語等の外来語に由来するもの¹²,そして語頭のoが二重母音化するときに付けられるものなどが¹³。

ラテン語の **H** は早くから失われる傾向があり、スペイン語になっても初期にはaver「持つ」(< L. HABERE), omne「人」(< L. HOMINEM) のような綴り字が見られた。今日では語源を尊重してhaberr「存在する」, hombre「男」というように **H** を復活させているが, invierno「冬」などはとり残された¹⁴。

ラテン語のFは教養語では保たれているが,本来語では原則としてhに変化した、

L: FACTUM「事実」, FACOREM「行為者」

E: fact「事実」, factor「要因」

Sp. 教養語 factor「要因」, 本来語 hecho「事実」

発音とつづり字の関係を歴史的に見ると語源を尊重するものと発音の変化に対して綴り字を表音的に調整するものがある。英語は語源的であり,たとえばdebt, subtle, doubtなどの **b** はラテン語の

¹¹ v. gr. L. HONOREM > Sp. honor; L. FACERE > Sp. hacer.

¹² v. gr. historia; alcohol.

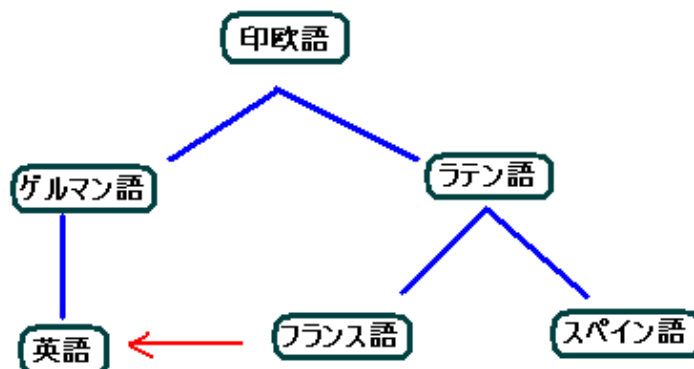
¹³ v. gr. oler → huelo.

¹⁴ 語源は L. HIBERNUS だから hi(m)bierno となるはずである。cf. E. hibernation「冬眠」。

DEBITUM, SUBTILEM, DUBITARE)に近づけて後に加えられたものであり, 中期英語ではそれぞれ dette, sutel, dout と書かれていた. 逆にスペイン語は **H** などの語源を尊重した綴り字はあるものの, 全体を見ればむしろ表音的です. 本来語ではラテン語形からかなり隔たった形をとるので, 対応のルールを知らないと学習のときに二重の記憶の負担になる. たとえば英, E: lactic acid 「乳酸」 - Sp. leche 「牛乳」 leche, E. ferro- (magnet) 「磁鉄鉱」- Sp. hierro等, これまでのルールを適用すれば関連性が容易に見つかる.

3. 共通の源

英語とスペイン語の関係を見るときに二つの面を区別しなければならない. ひとつは英語におけるロマンス語の要素, つまり借用によるもので, 前回までに扱った対応は主にこの関係による. もうひとつは共通の祖語(原始印欧語Proto-Indo-European, IE)から分派した言語であるという関係である. たとえばラテン語 (L.) transferre 「運ぶ」→Sp.transferir / E.transfer の対応は借用によるが, L.transferreのferre と E.bear 「一運ぶ」は共通の祖先 *bher¹⁵ を持ち, 同族関係になる. 次の図の赤線が借用関係を示し, 青線が同族関係を示している.



今回は二つの言語の同族関係に視点を置いて音の対応を調べてみよう.

●閉鎖音

IE.には以下の4系列が存在していたものと考えられる.

1)唇音	bh	b	p
2)歯音	dh	d	t
3)軟口蓋音	gh	g	k
4)唇軟口蓋音	g ^w h	g ^w	k ^w

¹⁵ *の印は理論的な推定形であることを示す.

この音組織はゲルマン語で次のような変化をした。

- **bh > b > p > ph (>f)**
- **dk > d > t > th (>θ)**
- **gh > g > k > kh (>h)**
- **g^wh > g^w > k^w > k^wh (>h^w)**

最初の行は **IE.bh** がゲルマン語(Gm) の**b**に変わり, **IE.b** が**Gm.p**に変わり, **IE.p**が**Gm. ph** (後に**f**) に変化したことを示す. 他の行についても同様である.

一方ラテン語では**bh > f, b; dh > f, b, d; gh > h, g; g^wh > f, v, gu, g** の変化を除けば、ほぼ**IE**の形を保持した. 以下は、これらの規則に従う対応の例である.

(1) IE.bg > Gm. b (>E, b) / L.f, b (> Sp.f, h ,b)

英語.	スペイン語
ball 「球」	fuella 「ふいご」
beard 「ひげ」	barba
bean 「豆」	haba (<L.faba)
beech 「ぶな」	haya (<L.fagus)
bid 「命じる」	fiar 「信頼する」
bottom 「底」	hondo 「深い」 (<L.fundus)
burn 「燃える」	hervir 「煮えたぎる」(<L.fervere)
brother 「兄弟」	fraile 「僧」

(2) IE.b > Gm. p (>E,p) / L.b (Sp.b)

英語	スペイン語
lip 「唇」	labio

(3)IE.p > Gm.f (> E.f) / L,p (>Sp.p)

英語	スペイン語
father 「父」	padre
feel 「感じる」	palpar 「触れる」
few 「少し」	poco
field 「平地」	plano
film 「薄皮, フィルム」	piel 「皮」
fish 「魚」	pez
food 「食物」	pan 「パン」
foot 「足」	pie

full 「満ちて」	pleno (lleno)
flow 「流れる」	llover 「雨が降る」(< L.pluere)

(4) IE.dh > Gm.d (>E.d) / L.f, b, d (>Sp.f, b, d)

英語	スペイン語
dig 「掘る」	fijo 「固定した」(<L・fixus)
mid 「中の」	medio
widow 「未亡人」	viuda

(5) IE.d >Gm. t (>Et) / L.d (>Sp.d)

英語	スペイン語
ten 「10」	diez
tooth 「歯」	diente
true 「真の」	duro 「硬い, 厳しい」
two 「2」	dos

(6) IE.t > Gm. th (>E.th [*]) / L.t (>Sp.t)

英語	スペイン語
thin 「細い」	tenue 「薄い, 細い」
thing 「物7事」	tiempo 「時」
thirst 「かわき, かわく」	tostar 「焼く」
thunder 「雷が鳴る」	tronar
three 「3」	tres
through 「～を通して」	trans 「接頭辞. …を越えて」

(7) IE.gh > Gm. g (> E.g) / L.h, g (>Sp.h)

英語	スペイン語
garden 「庭」	huerto 「畑」
get 「得る」	prender 「捕らえる」(< L.prehendere)

(8) IE.g > Gm. k (> E.k, ch) / L.g (>Sp.g [g, x])

英語	スペイン語
kind 「種類」	género
know 「知る」	conocer (<L.cognoscere)
choose 「選ぶ」	gusto 「好み」

(9) IE.k > Gm. kh (>E.h) / L.c [k] (>Sp.c [k, θ])

英語	スペイン語
hall 「広間」	celda 「僧房」
have 「持つ」	caber 「入りうる」
head 「頭」	cabo 「端, 岬」(< L.caput 「頭」)
heart 「心臓」	cuerto 「正気の」
hill 「丘」	colina
horn 「つの」	cuerno
hundred 「百」	ciento

(10) IE.g^wh > Gm. g^w (> E .w) / L.f, v, gu,g (>Sp.f, h, v, gu, g)

英語	スペイン語
snow 「雪」	nieve

(11) IE.g^w > Gm. k^w (>E.k, kw) / L.v,g (> Sp.v,g)

英語	スペイン語
come 「来る」	venir
cow 「牛」	buey
quick 「すばやい, 生きた(古)」	vivo 「生きた」
knee 「ひざ」	hinojo(<geniculum < L.genus 「ひざ」 + culum示小辞)

(12) IE.k^w > Gm. k^wh (> E.wh, f) / L.qu [kw] (>Sp. c, qu[k])

英語	スペイン語
what 「何」	qué
who 「誰」	quién
four 「4」	cuatro
five 「5」	cinco

このように音の変化は規則的に生じたので, 対応を調べる際にはこの規則に沿って考えなければならない¹⁶.

●摩擦音

sはラテン語で母音間にあるときにrに変化した。そこで, たとえば主格*latus* 「側」と属格*lateris*でs-rの交替がある。このためにSp.*lado* 「側面」(< L.*latus*)の形容詞*lateral*(< L.*lateralis*)にrが現われる¹⁷。

¹⁶ 形と意味が共に似ていても, day 「日」/ *día*, have 「持つ, 助動詞」/ *haber* のように語源が異なるものもある。

¹⁷ *cuero* 「体」 - *corporal*, *tiempo* 「時」 - *temporal* などを *persona* 「人」 - *personal*, *fin* 「終」 - *final* な

IE.*nido 「巢」の s はラテン語で消失してnidus (> Sp.nido)となったが、英語ではnest となって s が保たれている¹⁸。よって、Sp.nido と E.nest - nestle は同語源である。

●鼻音と流音

鼻音と流音は一般に保存されている。

- **m:** IE.*ma^hter 「母」> L.ma^hter (> Sp.madre) / E.mother
- **n:** IE.*enomen 「名」> L.no^hmen (> Sp.nombre) / E.name
- **r:** IE.*k^hreu 「血」> L.cruor 「血」, cru^hdus 「生の」 (> Sp.crudo) / E.raw
- **l:** IE.*leuk- 「照らす」> L.lu^hx 「光」 (> Sp.luz) / E.light

●半母音

語頭の半母音 [j], [w] も保存されている。スペイン語ではそれぞれj [x], v [b]に変化したことは前々回で述べた。

- **j:** IE.*iuuen- 「若い」> L.juvenis (> Sp.joven) / E.young
- **w:** IE.*ue^hntos 「風」> L.ventus (> Sp.viento) / E.wind

母音間では [j] は消失する傾向があるが、[w]は保たれている。

- **j:** IE.*treies 「3」> L.tres (> Sp.tres) / E.three
- **w:** IE.*neuos 「新しい」> L.novus (> Sp.nuevo) / E.new

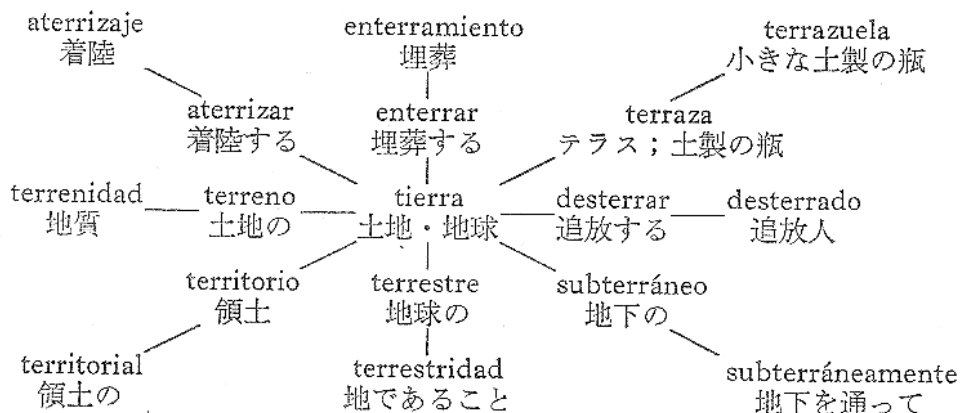
これまでにあげた例は基礎語ばかりである。基礎語は借用されることが少ないので、二言語の基礎語の間に一定の規則に従う対応があるならば、その両言語は共通の祖先から分派したものであろうと仮定することができる。19世紀のドイツを中心とするヨーロッパの言語学者たちが発見したこの音韻法則によって、今日インドからイラン、パキスタンを経てほぼヨーロッパ全土と周辺の島々をも包含する広大な地域に使われている諸言語が、はるか有史以前には共通の祖先を有していたことが証明された。

どと比較されたい。

¹⁸ E.nestle 「寄り添う」は nestling 「巣立たないひな」(nest+示小辞 ling)を誤って現在分詞と解釈され,ingを取り除いてできた語形である。

4. 派生語

次の図は核となるtierraを中心にしてその派生語を放射状に並べたものである。



このネットワークの中心になる *tierra* のように独立して用いられる語に接頭辞や接尾辞が付け加えられて新語を作ることは、既存の要素を利用するだけなので、ことばの目録の数の点で経済的と言える。学習者の立場からすると、結合する要素とその方式を知ることが語彙力の向上に役立つ。

ここで英語とスペイン語の主な接頭辞と接尾辞を比較しながら整理しておこう。

●接頭辞

スペイン語の接頭辞はほとんどがギリシャ・ラテン系だが英語の中には *be-* (*befriend*), *for-* (*forget*), *to-* (*today*), *un-* (*unwilling*) などの古英語に遡るものもある。

ギリシャ語・ラテン語系の接頭辞は両言語に共通である。以下は意味の面からの分類である。

(1) 否定(反対・欠除・悪・軽蔑)

- **non-** 英語では接頭辞だが、スペイン語では副詞の *no* を使って独立して否定する。例: Ing. *non-scientific* / Sp. *no científico*
- **in-** 英語では *l* の前で *il-*, *r* の前では *ir-*, *p*, *b*, *m* の前で *im-* と音韻変化するが、スペイン語では *l* の前で *i-*, *m* の前で *in-* となることに注意したい。例: Ing. *insane* / Sp. *insano*, *illegal* / *ilegal*, *irrelevante* / *irrelevante*, *improper* / *impropio*, *immediate* / *inmediato*
- **dis-** *disgust* / *disgusto*
- **a-** *amoral* / *amoral*
- **de-** *devolve* / *devolver*
- **mal-** *malevolence* / *malevolencia*

(2) 態度

counter- / **contra** 「反逆」 *counterattack* / *contraataque*

anti- 「反対, 敵対」 *antisocial* / *antisocial*

pro- 「賛成」 *procommunist* / *procomunista*

(3) 場所

- **super-** 「超越」 superman / superhombre
- **sub-** 「下位」 subway / subterráneo
- **inter-** 「中間, 相互」 international / internacional
- **trans-** 「超えて」 transatlantic / transatlántico

(4) 時間, 順序

- **pre-** 「前」 pre-war / preguerra
- **post-** 「後」 post-war / postguerra
- **ex-** 「以前」 ex-president / expresidente

(5) 程度, 数

- **archi-** 「首位の」 archduke / archiduque
- **hyper-** / **hiper** 「超越」 hypersonic / hipersónico
- **ultra-** 「極端」 ultraviolet / ultravioleta
- **mini-** 「極小」 miniskirt / minifalda
- **uni-** 「1」 unilateral / unilateral
- **mono-** 「1」 monotheism / monoteísmo
- **bi-** 「2」 bilingual / bilingüe
- **tri-** 「3」 triangle / triángulo
- **multi-** 「多」 multiform / multiforme
- **poly-** / **poli-** 「多」 polygamy / poligamia

これらの接頭辞の中で, inter- super- などはスペイン語の前置詞 *entre*, *sobre* と同語源である。他にも, ad- (a-), ante-, con- (co-), contra, en などは接頭辞と前置詞で対になる。adjunto (junto a), anteojos (ante ojos), colaborar (laborar con), contradecir (decir contra), embarcar (en barco)。

●接尾辞

スペイン語のギリシャ・ラテン語系の接尾辞は元の形をよく保持しているが, 英語では接尾辞が弱化して短縮化し, アクセントは前に移動している。

(1) 動詞接尾辞

- **Ing. -ate / Sp. -ar** elevate / elevar
- **-fy, / -ficar** modify / modificar
- **-ize / -izar** utilize / utilizar

動詞について重要な点は, 英語の多くのラテン借用語形がラテン語の過去分詞に由来し, スペイン語はラテン語の不定形に由来することである。Ing. -ate / Sp. arの対応がその一例である。不定形L.

e^o-leva^o-re 「揚げる」の過去分詞はe^o-leva^o-tusで、前者からSp. elevarが、後者からE. elevateの形ができた。英語でラテン過去分詞形が用いられるわけは、英語本来の過去分詞の形(不定形+ed)にならってelevatedという誤った二重の過去分詞形ができ、ここから逆に不定形をelevateと解釈したためだと考えられている。このような事情のために、E. -ate 型動詞に対応するSp. -ar 型動詞は多い。例. dedicate / dedicar, predicate / predicar, indicate / indicar, complicate / complicar, communicate / comunicar.

ラテン語の第二変化 (-e(re), -itus) と第四変化 (-i(re), -i(tus)) についても同様である。E. exhibit (< L. exhibitus) / Sp. exhibir (< exhibe(re)), unite (< u(ni(tus)) / unir (< u(ni(re)).

ラテン語の第三変化の過去分詞では動詞幹に直接-tusを付けるため、英語では語末に子音が連続する。E. erect (< L. e^o-re^o-ctus) / Sp. erigir (L. e^o-rigere), conduct (< L. conductus) / conducir (< L. dondu^o-cere).

次はラテン語内の音韻変化による。E. discuss (< L. discussus < discut + tus) / discutir (< L. discutere)

Ing. modifyは(古)フランス語のmodifier (< L. modifica^o-re) に由来する。よりラテン語に近いSp. modificarの -fic- (< L. facere > Sp. hacer) は名詞化すると英語にも現れる。modificationが、不定形では -fy のように弱化する。

(2) 名詞接尾辞

- Ing. -ade / Sp. -ada limonade / limonada
- -age / -aje language / lenguaje
- -ance / -ancia distance / distancia
- -ant / -ante participant / participante
- -ator / -ador cultivator / cultivador
- -ine / ina vitamine / vitamina
- -oid / -oide mongoloid / mongoloide
- -ot / -ota patriot / patriota
- -ty / -dad university / universidad

英語の -er は動作者を示す古英語起源の接尾辞だが、別にラテン起源の -or があり、これは t または s で終るラテン語の過去分詞語幹に付けられる。editor, cultivator, censor. 現代英語では、この -or や -ant で終る「行為者」を示す接尾辞(assistant)を除けば、-erがほとんどの動詞に付けることができるほどに優勢である。たとえばかつて存在したobserver (cf. Sp. observador) も現在ではobserverにとって代わられている。これに対しスペイン語ではほとんどが本来の -or 型なので、E. -er / Sp. -ador(a)で対応する例が多くある。例. Ing. lancer / Sp. lanzador, publisher / publicador, skier / esquiador.

また、Ing. defender / Sp. defensor, extinguisher / extintor などIng. L.不定形+er / Sp. L.過去分詞形+orの対応の例である。

(3) 形容詞接尾辞

- E. -acious / Sp. -az audacious / audaz.
- -aneous / -áneo instantaneous / instantáneo
- -ant / -ante abundant / abundante

- **-arious / -ario** precarious / precario
- **-ary / -ario** primary / primario
- **-ate / -ado** duplicate / duplicado
- **-ent / -ente** innocent / inocente
- **-ic / -ico** comic / cómico

両言語に共通する形容詞接尾辞 **-al** と **-ar** は同語源で, **-ar** は 1 が先行する場合に使われる. 例. Sp. real, legal, oficial, formal; similar, regular, familiar.

(4) 副詞接尾語

英語では **-ly** (directly), スペイン語では **-mente** (directamente) が副詞を形成する接尾辞で, 両者とも元来は独立した意味を持っていた. E. **-ly** はゲルマン語の *likom 「体」に由来し, たとえば manly は語源的には「男の外見・形をもった」ということになる. 一方, Sp. **-mente** は L. mens 「心」に由来し, これはもともと simulata mente 「心をいつわって」のように「心で, 気持ちで」という固有の意味を持っていたものが, 次第に固定して副詞接尾辞となった. ゲルマン語の「体」とラテン語の「心」は対照的で興味深い.

以上で, 主な接頭辞と接尾辞を見てきたが, あるものは大変に生産的で次々に新語を生んでいる. 先の派生語のネットワークに aterrizar「着陸する」という語がある. これは a- 「～に向かって」, terr 「大地・地球」, -izar 「～化する」の3つの要素から成る. 地球ではなく, 「月に着陸する」という意味ならば, luna「月」を使うことになる. 派生の比例式 tierra : aterrizar = luna : x の未知数が求められ, 事実 alunizar という新語が使われている. 言語の力強い生命力(増殖力)を示す例である.

5. ギリシャ語源

ギリシャ語では語幹と接辞の結合による派生や語と語の結合による合成がさかんに行なわれる. このため近代科学の新しい術語には直接的にも間接的にもギリシャ語源のものが多く, そうした新語には英・西語に共通するものが多い. ただし, それぞれの言語には固有の音韻・形態上の規則があるので, 常に同形になるとは限らない.

●音韻

υ [ユプシロン], θ [テータ], ρ [ロー], φ [ピー], χ [キー]はラテン語でそれぞれ y, th, rh, ph, ch と転記される.

ギリシャ語の υ [u] は古い金石文では V と Y との2通りに刻まれていた. このうちの V の角(かど)がとれてラテン語の U が生まれ(音は同じ [u]), その後ローマ人が多量のギリシャ語を借入したときに, ギリシャ語では [u] > [y] と変化していたため, 第二の形 Y をもって, この [y] 音に当てた. この y をスペイン語では i griega 「ギリシャ語のi」と呼ぶ. しかし, この文字はギリシャ起源の u には当てられず, その代わり i が用いられる. 一方英語では語中の母音として y のある語は大部分がギリシャ語源である. よって (英) y / (西) i の対応になる. 例. (英) hymn / (西) himno「賛美歌」, myth / mito 「神話」, system / sistema 「システム」, style / estilo「型」.

θ, φ, χ, ρ はそれぞれ以下のような変遷をたどった。

ギリシャ語	ラテン語	英語	スペイン語
θ	th	th [θ]	t [t]
φ	ph	ph [f]	f [f]
χ	ch	ch [k]	qu [k]
ρ	rh	rh [r]	r [r]

th, ph, ch, rh は、ギリシャ語の音 [th], [ph], [kh], [rh] をより正確に転写するためにローマ人が考案した二重字で、前2世紀ごろから使われていた。しかし音の方は、[h]音を落として、単に[t], [p], [k], [r] と発音していたようだ。ここまでは4者平行した変化だったのだが、以後それぞれ別の道をたどることになる。

th [*] は、英語では在来からの th [*] と合流したが、スペイン語では文字は単純化して t となった。(英) th [θ] / (西) t [t] theme / tema 「主題」、throne / trono 「王座」。

ph は後に f [f] と混同して、スペイン語では ph と f のどちらも f [f] に統一されたが、英語では教養ラテン語の影響で、この f から ph が復元した。発音は [f] のまま変わらなかった。(英) ph [f] / (西) f [f] Philip / Felipe 「人名」、orphan / huérfano 「孤児」。(英) fancy / fantasy などには古い f が残っている。

kh もラテン語の本来の音ではなかったもので、[k]に代用され、文字もしばしば c と書かれた。これがスペイン語にも伝わったが、[i] と [e] の前では [k] 音を保たせるために qui, que と書くようになった。英語の ch は英語本来の語では [t*] と発音されるが(such, which)、ギリシャ語源の語の多くは [k] と発音される。(英) ch [k] / (西) c,qu [k] character / carácter「性格」、chorus / coro 「合唱」、monarchy / monarquía 「君主制」。

●語尾のma

スペイン語の名詞には性の区別があり、-oで終わる名詞は男性で、-a で終わる名詞は女性というのが原則である。例. el libro 「本」(男性名詞)、la casa 「家」(女性名詞)。しかし、clima, drama, tema, sistema 等は -a で終わりながら男性名詞である(el clima, el drama, el tema, el sistema)。これらは「ギリシャ語源の-maで終わる名詞」と言われ語尾-aの例外として扱われるが、本来ギリシャ語で mat で終わる語幹をもつ名詞であり中性だった¹⁹。ただ主格では最後の t は消失しているが(systemat > systema)、他の格では属格systematosのように t が現われる。現代スペイン語においても、この「幻のt」は次のように派生語の中で出現する。

- tema 「(名)主題」 - temático 「(形)主題の」
- drama 「(名)戯曲」 - dramático 「(形)劇的な」
- problema 「(名)問題」 - problemático 「(形)問題の」
- esquema 「(名)図式」 - esquematar 「(動)図式化する」

ma 以外で終わるギリシャ語源の派生語にこの t は現われない。例. ángel 「天使」 - angélico, 「天使

¹⁹ 中性名詞はスペイン語になると男性名詞となった。

の」。また、同じ-*ma*で終わる名詞でも*cama*「ベッド」、*fama*「名声」、*forma*「形」などはギリシャ語源ではなく、派生語内に *t* が現われず、文法性も女性名詞である。このように、-*ma*で終わる語が男性名詞か女性名詞か迷うときは派生語が手がかりになる。英語についても派生語の関係は同様である。

●合成語

造語力に富むギリシャ語は近代語の中に多くの新合成語を生んできた。合成は接辞による派生とは異なり、合成は2つ以上の語が合わさる過程である。この場合、(1) 後につづく語が子音で始まるときは、-*o*-によって連結し、(2) それが母音で始まるときは、-*o*-をつけずそのまま連結する。

- (1) *termómetro* 「寒暖計」 < *term-*「熱」 + *metro* 「尺度」
cardiograma 「心電図」 < *cardi-*「心臓」 + *grama* 「書かれたもの」
geografía 「地理学」 < *ge-*「土地」 + *grafía*「記録」
- (2) *demagogo* 「扇動家」 < *dem-*「民衆」 + *agogos* 「導いて行くもの」
filántropo 「慈善家」 < *fil-*「愛」 + *antropo* 「人」
psiquiatría 「精神病学」 < *psiqu-*「精神」 + *iatría* 「医術」

●接尾辞の相違点

英語とスペイン語を比較すると・その接尾辞に以下のような違いが見つかる。

	E.	(西)	
(1)	<i>mathematics</i>	<i>matemática</i>	「数学」
	<i>politics</i>	<i>política</i>	「政治学」
	<i>ethics</i>	<i>ética</i>	「倫理学」
(2)	<i>sociologist</i>	<i>sociólogo</i>	「社会学者」
	<i>physiologist</i>	<i>fisiólogo</i>	「生理学者」
	<i>anthropologist</i>	<i>antropólogo</i>	「人類学者」
(3)	<i>philosopher</i>	<i>filósofo</i>	「哲学者」
	<i>astrologer</i>	<i>astrólogo</i>	「占星師」

(1)では英語の語尾が複数形(-*ics*)に対してスペイン語の女性単数形(*ica*)が対応している。ギリシャ語の-*ikos*で終わる形容詞の女性単数形-*ke*は「学芸、技術」などを指し(例・*rhetoriké*「雄弁術」>(英)*rhetoric*、(西)*retórica*)、一方、別に中性複数形-*ika*は、「～に関するもの、論題」の意味で使われていた。それが次第に混同されて、ラテン語では同形(-*ica*、例、*politica*)で借用された・後に英語では「論述」の意味に、ギリシャ語複数の -*ika* からその複数であることのみを取り入れて -*ics* の形が使われはじめ、学問の名に-*s*をとるようになった。スペイン語はラテン語形-*ica*を継承している。

(2) ギリシャ語では接尾辞-*ia*をつけることによって抽象名詞ができる。例、*philosophos*「哲学者」 + *ia* >

philosophía 「哲学」. スペイン語ではこの方法を受け継いでいる. 例. sociólogo 「社会学者」 + ia > sociología 「社会学」. しかし英語では逆に sociology から接尾辞 -ist により, sociologist 「社会学者」を作った. 本来のギリシャ語ならばこの ist は不要である.

(3) の-erも本来なら余分なもので, スペイン語の形の方がギリシャ語を正しく伝えている.

●人名

人名の中にはギリシャ語に由来するものが多くある. その中で興味あるものをいくつか取り上げる.

(英) Alexander / (西) Alejandro < (ギリシャ語) alex- 「守る」 + andro 「人」

Catharine / Catarina < kalthar- 「青い」 + ina (接尾辞)

Cristopher / Cristóbal < Christo 「キリスト」 + pher 「運ぶ」

Dorothy / Dorotea < dóro- 「贈り物」 + theo 「神」

Eugene / Eugenio < eu- 「よい」 + gen- 「生まれる」

George / Jorge < ge- 「土地」 + erg- 「働く」

Helen / Helena < Helene (ギリシャ神話の神)

Margaret / Margarita < margarite~~s~~ 「真珠」

Nicholas / Nicolás < níche~~s~~ 「勝利」 + laos 「人々」

Peter / Pedro < pétros 「石」

Philip / Felipe < phi1- 「愛する」 + hippos 「馬」

Sophia / Sofía < sophia 「知恵」

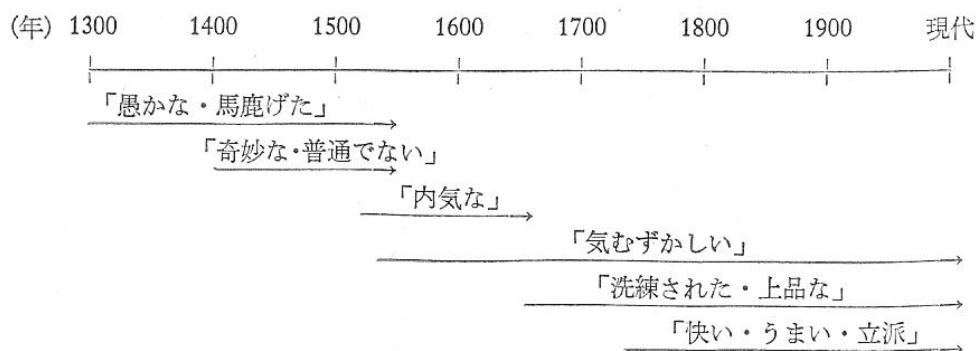
6. 意味

英・西語の対応を語形の面から見ると両言語の間には音韻や語形成(派生・合成)の規則的な変化にもとづく関係があることがわかる. 語形にかかわる音韻の変化は条件が同じであればどの語であっても大方一様に生じる. 例. L. nocte 「夜」> Sp. noche.L. octo 「8」>Sp. ocho. 「夜」と「8」の間には意味の上で関係がないが, L. -ct- の条件(隣接音との関係)が同様であるため, 両方の語でSp.chに変化するのである. .

また接頭辞や接尾辞による派生や語の結合による合成も, かなり機械的なプロセスと言える. このため英・西語の語形を比較するときには, その対応の規則を知っておくことが大切だ. またスペイン語を第二外国語として学習するときにも, その規則を有利に活用することができる.

●意味の変化

語は語形という姿と「意味」という内容の二面を備えている. 今回は意味の対応について考えてみよう. 意味変化には音韻変化と同様の法則性があるのだろうか. あるとすれば私たちには大変都合のよいことになる. 英語に音の変化の規則と意味の変化の規則を適用すれば, スペイン語の語形と意味を類推できることになる. 残念ながら, 意味のプロセスには心理的な要素が強く, 音のような物理的な素材と異なり, さらに複雑な過程を辿るようである. たとえば, E. nice の意味は時代とともに次のような変化をした.



この語は、L. *nescius*「知らない、未知の」に由来し、ne-「否定」+ *sci-re*「知る」の派生語である。しかし上の図でわかるように、語源的な「愚かな」という意味やそれから派生した「奇妙な」、「内気な」といった意味では今日用いられず、逆に良化して「うまい、見事な」といった用法が多くなった²⁰。

このような意味の大変化はむしろ極端な例であって、私たちはE.*nice*とSp. *necio*の関係を意識することではなく、学習のときにも類推は働かない。しかし一方では、語形の類似の上に、さらに意味の上で微妙な違いがあるために注意すべきものがある。以下がそのような例である。

- E. *attend* 「出席する, 付き添う」 / SP. *atender* 「付き添う」
- *guest* 「客」 / *hueste* 「軍勢」
- *introduce* 「紹介する, 導入する」 / *introducir* 「導入する」
- *lecture* 「講義, 講演」 / *lectura* 「読書, 読本」
- *luxury* 「ぜいたく(品)」 / *lujuria* 「淫乱」
- *money* 「金銭」 / *moneda* 「硬貨」
- *realize* 「気づく, 実現する」 / *realizar* 「実現する」
- *succeed* 「成功する, 継ぐ」 / *suceder* 「継ぐ, 続いて起きる, ことが生じる」

スペイン語で、「出席する」(E. *attend*) はSp. *asistir*, 「客」(*guest*) は *huésped*, 「紹介する」(*introduce*) は *presentar*, 「講演」(*lecture*, *conference*) は *conferencia*, 「ぜいたく(品)」(*luxury*)は *lujo*, 「金銭」(*money*)は *dinero*, 「気づく」(*realize*)は *darse cuenta (de)*, 「成功する」(*succeed*)は *tener éxito* となる。

ここで、E. *guest*, *host*; Sp. *hueste*, *huésped* を例に意味の変化の軌跡を辿ってみよう。印欧語の比較により、**ghosti-*「よそ者, 客」という語が想定され、印欧語族の古い時代に、よそ者を客として歓待し宿泊させる習慣があったと想定される。それが、E. *guest* 「客」の語源にあたる。一方、ラテン語では *hostis* 「よそ者, 敵」という対照的な意味をもっていた²¹。その後*hostis*は俗ラテン語の時代に「敵の軍勢」となり、さらにスペイン語では*hueste* 「軍勢」と変わった²²。一方、*hospes*に由来する*huésped*も、今日ではむしろ意

²⁰他方、同じ *nescius* に由来する Sp. *necio*, cf. E. *nescient* は相変わらず「愚かな」という意味を保っている。

²¹しかし、L. *hospes* (<*hosti* + *pots* 「家長」) は「客を迎える主人」という意味であるから、「よそ者」を敵とばかり考えていたわけではないのだろう。

²²現代語では *ejército* を使うのが普通である。*hueste* は古語、文語、または昔の戦いについて述べ

味が逆転して「客」を示すようになった。同じhospesを語源とするE.hostは「主人」の意味を保っている。なお、hotel とhospitalは同語源で、これも「客を迎える場所」が原義である。



●二重語

英語では、ラテン語やフランス語を取り入れた時期の違いから語形が二つ存在し、意味の上でも微妙に分担しているような対がいくつかある。たとえば、E.story「話」もE.history「歴史」も、L.historia、Gk.historiaにさかのぼる語だが、これにはスペイン語のhistoria「話、歴史」が両方に対応する。他にもE.curtsey「会釈」、courtesy「礼儀」がSp.cortesíaに、E.fragile、frail「もろい」がSp.frágilに、E.human「人間の」、humane「人道的」がSp.humanoに、E.pity「哀れみ」、piety「敬虔」がSp.piedadに、E.salon「サロン」、saloon「大広間」がSp.salónに対応する。

英語の二重語の中には意味が大きくずれ、片方だけがスペイン語に対応するものもある。

- E.sample「見本」/ (Sp. muestra), example「例」/ Sp. ejemplo
- mint「造幣局」(Sp.casa de moneda), money「金銭」/ Sp.moneda「硬貨」
- ticket「切符」(Sp.billete, boleto) / etiquette「エチケット」/ Sp. etiqueta,

●思い違い

語の意味をとり違えて語形を変化させたという興味深い例がある。「シェリー酒」は元来スペインのJerez (de la Frontera) という町の名による。昔、Jérez は sheris と発音され、この語尾のsを英国人は複数語尾と思い違いをして、sherryという「単数形」を作った。同じようにしてE.cherry「桜の木」とSp.cerezoの語形の違いが説明される。

E.orange / Sp.naranjaには語頭でnの有無の違いがある。これは、アラビア語 nārānj に由来するが、語頭の n が古フランス語で冠詞 (u)nと 考えられ、またar-とor (金) との混同もあってorendge となり、この形が英語のorangeに伝わったといわれる²³。

●第二外国語としてのスペイン語

森鷗外の『キタ・セクスアリス』の主人公金井湛は「人が術語を覚えにくくて困るというと、僕はおかしくてたまらない。何故語源を調べずに器械的に覚えようとするのだ…」と語っている。たしかに、そのままで

るときに使う。María Moliner, s.v. hueste. "Refiriéndose a guerras antiguas, ejército. (literario) Tropa o gente armada que sigue a una persona, respecto de ésta. 日本語の「軍勢」にあたる。

²³ これにはオレンジがフランス北部へ出荷される中継地 Orange の地名の影響によるという異説もある。

はなかなか覚えにくい外国語の単語も、その語源を知ることが記憶の助けになる。それも英語と関連させていけば効果はさらにあがるだろう。

英語の語源辞書には、Walter W. Skeat: *A Concise Etymological Dictionary of the English Language* や Eerast Klein: *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language* などの他に多くの専門的な辞書がある。英和辞書にも語源が記載されているので、それだけでも充分参考になる。スペイン語ではJoan Corominasの大辞典*Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*, 6 vols. があるが、それを簡略にした *Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Española* が手頃だ。残念なことに西和辞書には未だ語源の記述がなく、語義と語源を知るためには二冊の辞書を引くという手間がかかる²⁴。

これまで英語とスペイン語を比較して、その類似や相違の由来の一部を簡単に見てきた。語学的な興味のほか、第二外国語としてスペイン語を学ぶという多くの学習者の立場から、英語という第一外国語からスペイン語を切り離してしまうのが惜しいと感じたからである。しかし、スペイン語も、その固有の歴史的過程を経てきた言語であるだけに単純な対応づけは難しい。そして対応にあまり執着することは危険でもある。両言語の間に無闇に類推を働かせることなく、辞書にあたり、その語形や意味を比較し確認しながら、スペイン語を記憶する便法として語源の知識や対応のルールを活用すべきだろう。

²⁴ 現在では語源の記述があるスペイン語辞典として『西和中辞典』（小学館）がある。